

# 研究主題「中学年社会科における社会に参画する資質や能力の基礎の育成 —体験的な活動と言語活動を効果的に活用した学習を通して—」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課  
国立市立国立第二小学校 教諭 門上 麻衣子

## 第1 研究のねらい

学習指導要領（平成20年3月告示）は、社会科においては持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力の育成を基本方針の一つとして、改訂が行われた。しかし、平成21年の財団法人日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識」の調査結果によると、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」という質問に対して、肯定的な回答をした高校生の割合は、全体の約30%と少ない状況である。これは、アメリカ、中国、韓国の各国と比べても半数以下であり、青少年の社会への参加意欲を高めることが求められる。そのためには、社会科の入門期である小学校中学年の段階から、児童に地域社会の一員として地域社会にすすんで関わろうとする態度の育成が必要である。

そこで、実際に調査・観察するなどの体験的な活動を通して、地域社会の様々な事象に対する社会的な見方を育みながら、言語活動を通して、社会認識（社会的な事象の意味や役割への理解）をもたせる学習が重要だと考えた。本研究は、児童に社会に参画する資質や能力の基礎を育成するための、体験的な活動と言語活動を効果的に活用した学習の開発をねらいとした。

## 第2 研究仮説

体験的な活動と言語活動を効果的に活用すれば、児童に地域社会の一員としての自覚が高まるとともに社会認識をもたせることができ、社会に参画する資質や能力の基礎が育つ。

## 第3 研究の内容と方法

### 1 基礎研究

表1 社会に参画する資質や能力の基礎としての3要素

#### (1) 社会に参画する資質や能力の基礎としての3要素

学習指導要領解説社会編（平成20年8月）等の分

- ①社会的な事象を自分のこととして理解する力
- ②社会的な問題の解決方法を考える力
- ③社会に関わろうとする力

析により、社会に参画する資質や能力の基礎として必要な3つの要素（以下、「3要素」と表記。）を明確にした（表1）。要素の①から③を単元の中で段階的に身に付けさせる指導を積み重ねることによって、社会に参画する資質や能力の基礎が児童に育成できると捉えた。

#### (2) 社会科における体験的な活動と言語活動についての分析・整理

表2 7種類の体験的な活動

先行研究や文献の分析により、体験的な活動を7類型に分類し、具体的な活動内容を明確にした（表2）。言語活動は、平成24年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育

- A 調査・見学・観察して調べる活動
- B 実際にやってみる（実体験）活動
- C 追体験する活動
- D ものをつくる（製作）活動
- E 操作・構成活動
- F 人々との触れ合いのある活動
- G 作品にまとめる活動

委員会）や、平成22・23年度「言語活動の充実に関する研究」（東京都教育委員会）を分析した結果、資料を活用して考えたり、自分の言葉で表現したりする活動を充実させることによって、社会的な事象の意味や役割への理解を深めることができると考えた。

### 2 調査研究

平成24年7月に都内公立小学校7校の教員75名、第3学年から第6学年までの児童819名を対象に、4件法による自己評価で調査を実施したところ、以下の点が明らかになった。

中学年での地域学習を経験した高学年児童のうち、「地域をよりよくするための方法を考えた

ことがある」など、3要素に対する自己評価が全て肯定的である児童の90%が、自分自身を地域社会の一員と自覚し、社会科の学習が分かると自己評価していることが分かった。この結果から、社会に参画する資質や能力の基礎の育成には、地域社会の一員としての自覚を高め、社会認識をもたせる指導の必要性が確認できた。

また、第3学年から第6学年の社会科が苦手な児童の約50%が、資料を読み取ったり、自分の考えを表現して伝え合ったりする学習に苦手意識があることも分かった。

教員対象の調査では、情報を比較・関連付け・総合しながら再構成したり、自分の言葉でまとめたことを伝え合ったりする学習を取り入れていると肯定的な回答をした教員は、全体の約60%にとどまっていた。児童対象の調査結果と関連させると、これらの学習を充実させることが、社会科の学習が分かり、社会認識をもつ児童の育成につながると考えた。

### 3 開発研究

#### (1) 「社会に参画する資質や能力」に関する系統表(小学校中学年～中学校)の作成

学習指導要領及び解説を整理し、各学年で身に付けさせたい具体的な内容を、「社会的な事象を自分のこととして理解する力」、「社会的な問題の解決方法を考える力」、「社会に関わろうとする力」の3要素に分けて示した。それによって、小学校教員が中学校との接続を意識した系統的な指導ができるようにした。

#### (2) 3要素を育成する学習活動の視点と学習過程への位置付け

(1)の系統表の内容に基づいて、児童に3要素を育成するために押さえるべき視点を、「つかむ」「調べる」「まとめる」「かかわる」の学習過程ごとに示した(表3)。指導の重点を3要素の①から③へと順に移しながら、これらの視点を単元全体の中で取り入れることによって、社会参画の視点を取り入れた問題解決型の学習が成立するようにした。

表3 3要素を育成する学習活動の視点と学習過程への位置付け

社会に参画する資質や能力の基礎としての3要素		
①社会的な事象を自分のこととして理解する力	②社会的な問題の解決方法を考える力	③社会に関わろうとする力
つかむ ・社会的な事象への関心を高める	社会的な事象について、自分自身と関連付けたり、よさに共感したりして理解したことを基に考える	
調べる ・地域社会で働く人々の思いや願いに共感する ・地域社会で働く人同士が、地域社会をよりよくするために工夫や努力をしていることを理解する	地域社会の課題を見いだす	地域社会の課題を基に実践する
まとめる 「調べる」で取り入れた視点について総合的にまとめる		
かかわる ・社会に関わった結果を評価したり、新たな課題に気付いたりする	・地域社会の課題を解決するために、自分自身を実践すること	

#### (3) 体験的な活動と言語活動を効果的に活用した学習

社会に参画する資質や能力の基礎を育成するためには、(2)の視点を取り入れた学習活動により、児童に地域社会の一員としての自覚を高め、社会認識をもたせることが必要である。そのために、「資料を活用して考える言語活動」を、体

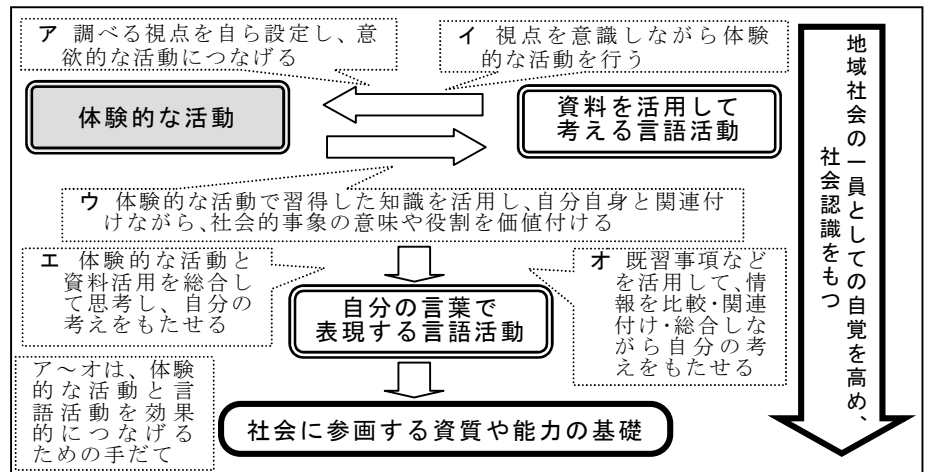


図1 体験的な活動と言語活動を効果的に活用した学習のイメージ図

験的な活動の前に取り入れることで、意欲的で目的意識のある体験的な活動を促す。また、「資料を活用して考える言語活動」を体験的な活動の後に取り入れることで、体験的な活動での学びを生かして社会的な事象を具体的に理解させる。そして、その理解を「自分の言葉で表現する言語活動」につなげることで、社会的な事象の意味や役割について考えを深めさせるようにする。また、これらの体験的な活動と言語活動につながりをもたせて指導することが重要であり、その具体的な手だてを示した（図1）。

#### 4 検証授業

##### (1) 検証の概要と指導の実際

体験的な活動と言語活動につながりをもたせて効果的に活用すれば、単元全体を通して児童に3要素が育成できることを検証するために、第4学年「ごみのしまつと再利用」において授業を実施した。その中で、清掃工場の見学と言語活動につながりをもたせた学習では、燃やすごみの処理についての工夫を理解させるために、表4に示した手だてを講じて指導を行った。

表4 社会科見学と言語活動を効果的につなげた学習における指導の実際（第5-7時）

学習活動（ <b>体験的な活動</b> ・ <b>言語活動</b> ）	体験的な活動と言語活動を効果的につなげるための手だて（図1）
<p><b>私たちが出した燃やすごみは、どのようにして処理されているのだろう。</b></p> <p>○清掃工場の平面図を見て、燃やすごみの処理過程を知り、疑問に思ったことや、詳しく調べたいことを考え、話し合う。</p>	<p><b>【手だてーア、イ】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平面図を提示する際、中央制御室、焼却炉、排ガス処理設備、発電機に関する説明を意図的に省いておくことで、児童にそれらの設備に疑問や関心をもたせる。</li> <li>・児童の疑問や関心から見学の視点をまとめ、目的意識をもって見学に向かわせる。</li> </ul>
<p>○疑問や詳しく調べたいことを基にして、見学の視点を設定する。</p> <p><b>資料を活用して考える言語活動（資料から必要な情報を集めて読み取る活動）</b></p> <p>○見学の視点に応じて、清掃工場を見学したり働く人に話を聞いたりする。</p> <p><b>体験的な活動（調査・見学・観察して調べる活動）</b></p>	
<p>○燃やすごみの処理の工夫について、自分の言葉でまとめる。</p> <p><b>自分の言葉で表現する言語活動（考えたことを自分の言葉でまとめる活動）</b></p>	<p><b>【手だてーエ】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・清掃工場の平面図などの資料から読み取ったことと、工場見学で調べたことを、関連付けたり総合させたりしながら考えさせる。</li> </ul>
<p>○燃やすごみの処理の工夫について、自分の言葉でまとめたことを伝え合い、自分の考えを再構成する。</p> <p><b>自分の言葉で表現する言語活動（自分の言葉でまとめたことを伝え合う活動）</b></p> <p><b>自分の言葉で表現する言語活動（思考を深める活動）</b></p>	

##### (2) 検証授業の結果

###### ア 抽出児童の変容

検証授業前の意識調査で、地域社会の一員としての自覚や3要素に対する自己評価が肯定的ではなかったA児の変容を、ワークシートの記述や行動観察から分析した。

- ① 「つかむ」段階では、学習問題に対して、ごみが処理される施設については予想できたが、働く人の存在には着目しなかった。
- ② 「調べる」段階では、清掃工場を見学して、ごみ減量化のための工夫やエネルギーの有効活用などの工夫を理解した。また、資源の有効活用のために働く人々の仕事を疑似体験して、働く人々の思いや願いに気付き、ごみを分別することの意味を理解した。
- ③ 「まとめる」段階では、学習問題に対する自分の考えをまとめ、ごみを処理する仕事の役割や工夫だけでなく、働く人々の共通の思いにも気付いて記述した。また、自分もごみの減量化に協力しようという思いをもった。
- ④ 「かかわる」段階では、ごみの減量化やきまりを守ってごみを出すことの大切さを、「環境カルタ」に表現して市民に伝えた。カルタを見た市民が、ごみに対する意識を高めたことを知ると、「自分にも地域のためにできることがあると分かった」と、地域社会の一員としての自覚を高め、今後も地域社会のために行動したいという思いをもった。

## イ 児童全体の変容

検証授業前後で意識調査を行ったところ、地域社会の一員としての自覚をもつ児童の割合が55%から100%に増加した。また、各時間のワークシートの記述分析によると、社会認識をもった児童の割合は、79%から97%となり、約20ポイント増加した。特に、「調べる」段階の後半は、90%以上の児童が社会認識をもつことができた。これらの結果に伴って、3要素に対する自己評価が全て肯定的である児童も54%から94%に増加した(図2)。

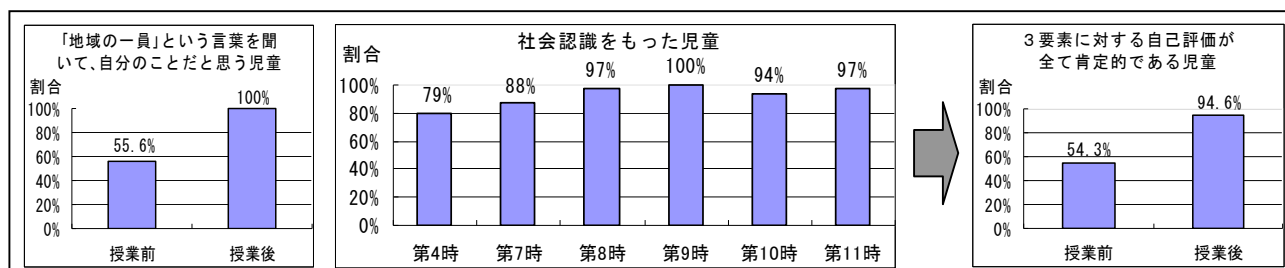


図2 検証授業における児童の変容

## (3) 検証授業の考察

### ア 3要素を育成する学習活動の視点と学習過程への位置付け

「調べる」段階では、主に要素①②の視点を活用することにより、地域社会で働く人々の姿を中心に調べ活動を行ったことで、児童は働く人々の工夫や努力、思いや願いに気付き、共感することができた。それを「かかわる」段階につなげて、主に要素③の視点を活用した学習活動を行うことにより、児童は意欲的に地域社会と関わり、社会的な有用感をもつことができた。

また、「調べる」段階の前半で習得した知識を、後半の地域社会の問題について考える学習活動の中で繰り返し活用できたことは、児童に社会認識をもたせることにつながった。

### イ 体験的な活動と言語活動を効果的に活用した学習

体験的な活動と「資料を活用して考える言語活動」につながりをもたせたことで、地域の社会的な事象について、自分自身との関連や社会的な意味・価値を考えさせることができた。さらに、それを「自分の言葉で表現する言語活動」につなげたことで、社会的な事象の意味や役割についての理解を深めさせることができた。

## 第4 研究の成果

- ・ 体験的な活動と言語活動につながりをもたせた学習によって、児童に「地域社会の一員」としての自覚を高めたり、社会認識をもたせたりすることができた。
- ・ 3要素を育成する学習活動の視点を取り入れた体験的な活動と言語活動によって、単元の終末には3要素に対する自己評価が肯定的な児童が増加した。この結果より、学習活動の視点を取り入れた体験的な活動と言語活動を効果的に活用した学習を継続することで、社会に参画する資質や能力の基礎を児童に育成できることが明らかになった。

## 第5 今後の課題

- ・ 高学年における「3要素を育成する学習活動の視点」や、「体験的な活動と言語活動の効果的な活用の手だて」を明確にし、系統的な指導計画の作成と実践を行う。
- ・ 総合的な学習の時間や特別活動などに関連させた年間指導計画を作成し、児童が地域社会と直接関わる活動を拡充する。